

「神様に生かされる人生」

ヤコブ書4章13-15節

「聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう」と言う人たち。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。

むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう」

1. 自分の人生について考えること

今日は高齢者顕彰礼拝です。私たちが神様に生かされていること。生き生きと生かされていることを感謝したいと思います。

めぐみ教会では、喜楽希楽会や喜楽希楽サービスの働きがあり、楽しくて、そして豊かな交わりがあります。

コロナ禍の影響で喜楽希楽会の活動は残念ながら、お休みが続いていますが、喜楽希楽サービスは休むことなく、神様に守られながら営業を続けてきました。

第一礼拝から第三礼拝まで、二人ずつ、合わせて6人の方々が、職員として、利用者として、それぞれの証しをしてくださいます。

デイサービスの職員、ケアマネージャー、訪問ヘルパー、利用者、そして利用者の家族。それぞれの立場での証しは恵みと感謝に溢れています。

さらに加えるとすれば、デイサービスの厨房の証しです。

私の体の半分は喜楽希楽サービスの食事です。来年はぜひ喜楽希楽会の楽しいランチの証しと、喜楽希楽サービスの厨房の証しも聞きたいと思います。

私自身も、喜楽希楽サービスでの交わりを楽しみつつ、主にある交わりの豊かな恵みを受けています。

共に集まる職員も利用者もそれぞれの人生があります。出身地も違えば、今の生活環境も違いますし、性格の違いや食事の好みも違います。

デイサービスでは、互いの違いや個性を尊重し合いながら、一緒に楽しく過ごしています。お昼には毎日のように聖書のメッセージをしています。

メッセージの中で、互いの違いを乗り越えられる話題としては、例えば大相撲や将棋の話でしょうか。

特に今年は、孫のような存在である藤井聡太二冠の活躍で盛り上がりました。

聖書のメッセージですから、大相撲や将棋の話をしながらか、人生について考えます。

私は将棋には詳しくないのですが、将棋の戦法を通して、人生の戦い方を考えることもできるでしょうか。

藤井聡太二冠の師匠によれば、棋士の多くは次の差し手をおおよそ3つに絞り込むそうです。差し手が5つから7つ思い浮かんだときも、最終的には残る選択肢は3つくらいということです。

「危険を承知で踏み込んで、積極的に勝ちに行くか。あるいはこれを選べば、とりあえず、すぐには負けない無難な一手を選ぶか。どちらを取るかは、その場面にはよりますが、最後は自分の将棋観に沿う手を選ぶことが多くなる」

ちなみに、藤井聡太二冠は積極的に踏み込んでいく手を選ぶそうです。

私たちは、どのような将棋観ならぬ人生観を持っているのでしょうか。

聖書にはこう書かれています。

ヤコブ書4章13-14節

「聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう」と言う人たち。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません」

私たちは、つつい全てのことが自分の思い通りにいくかのように物事を考えてしまいます。

そんな私たちに対して、「あすのことはわからないのだ」と言われます。

「あなたがたのいのちは限られたものなのだから、そのことをわきまなさい」。

「自分のいのちが永遠に続くかのように、あるいは自分が世界を支配しているかのような高ぶった思いを捨てるように」と言われるのです。

世界の大金持ちや権力者たちは自分が世界を支配しているかのようにふるまうかもしれませんが。

しかしどんなに権力があっても、病によって力が奪われるということがあります。どんなにお金を持っていたとしても、短い人生で本当にそんなにお金が必要なのでしょうか。

たとえ商売に成功しても、お金がどれほどあっても、どんなに権力があっても、人間には弱さがあり、与えられたいのちには限りがあります。

それでも人々は、限りある人生から目を逸らすかのように、「今良ければ良いのだ、お金があれば良いのだ、自分が良ければ良いのだ」と言いながら、自分が求めることは間違っていないのだと、それぞれがそれぞれの人生を生きています。

しかし、私たちは、「あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか」という問いにしっかりと答えることができるでしょうか。

2. 私たちが生かされているということ

私たちが「生きる」ということを考えるときに、ハイデルベルク信仰問答の間が頭に浮かびます。

ハイデルベルク信仰問答 問1

「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか」

答え

「私が自分自身のものではなく、体もたましいも、生きるにも死ぬにも、私の真実な救い主イエス・キリストのものであることです」

「自分のものである」「自分の思い通りになる」と考えていた人生が、実は「私の救い主であるイエス・キリストのものである」ということなのです。

「自分の人生は自分のものであり、お金儲けのため、自分の欲望のために生きるのだ」という人生観とは全く違う人生観です。

私は教会に導かれ、イエス様と出会い、この事実を知ったときに、本当に驚きました。

「私の人生は主のものである」。

Iテサロニケ5章10節にはこう書かれています。

「主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです」

私のために死んでくださり、救い主となってくださったお方が、目覚めているときも、寝ているときも、どこにいても、なにがあっても、いつでも、いつまでも、共にいてくださるのです。

私の人生は、主のものであり、主と共に生きる人生だということです。

私たちに必要なのは、お金でもなく、権力でもなく、救い主イエス・キリストであり、イエス様が与えてくださる、「助け」が必要なのです。

それは、私たちの喜楽希楽サービスの働きにも通ずるところがあります。

「自立支援」という言葉がありますが、お金があれば良い、力があれば良い、自分の力で、ひとりでできれば良いというのが「自立」ではありません。

自立というものは、「自分の力」で成り立つものではなく、「他者に助けを求める力」も含めて自立することになると言われます。

自立は、何メートル歩けるかとか、何ができるかということよりも、自分なりの意味や目的をもって、助けを受けながらも自分の意志で行動できているかということなのです。

特に自立にかかせない要素として、「意欲」があります。意欲が無ければ、行動することができません。生きる意欲がなければ、生きることができません。

多くの人々は、この「意欲」というものが、お金であったり、人々に認められることであったり、快樂であったり、欲望であったりするのではないのでしょうか。

しかし、聖書のみことばが私たちに問いかけるのです。

「あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか」

「私が自分自身のものではなく、体もたましいも、生きるにも死ぬにも、私の真実な救い主イエス・キリストのものである」と私たちが答えるとき、私たちが信仰によって自立して生きるということは、イエス様によっていのちを与えられ、そしてイエス様によって助けられながら生きるということになります。

聖書にはこのような祈りがあります。

詩編18篇1-3節

「彼はこう言った。主、わが力。私は、あなたを慕います。主はわが巖、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。ほめたたえられる方、この主を呼び求めると、私は、敵から救われる」

「主が力であり救いである」。私たちの人生は、主なるお方いなければ何もできないと、心から祈るほどに、主なるお方に依存しているのです。

「依存は自立に欠かせない」とも言われます。

依存は、自立の反対ではないか。すべて自分の力でやることは良いことで、人に依存することは悪いことだという極端な考え方もあります。私たちのうちに「依存」ということに対するマイナスのイメージが無意識のうちに刷り込まれてしまっています。

しかし、誰であっても、人の助け無くして、何もかも自分の力で生きていくということは不可能なことであって、他者に助けられることが「依存」であって、人に依存してはいけないという考え方をすれば、誰も「自立」して生きることが不可能になり、「自分らしく」、「その人らしく」生きることは実現不可能でしょう。

イザヤ書41章13節。

「あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける」と言っているのだから」

私たちは、「恐れるな。わたしがあなたを助ける」と言ってくれるお方に信頼し、主からの助けを求めつつ、互いに助け合いながら生きていくのです。

3. 愛のある関係性の中で生きる

私たちの生きる社会には、神様のルールではなく、人間のルールがはびこっています。人間のルールは欲望のルールです。神中心ではなく、自分中心です。

ヤコブ書4章13節で、

「聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう」と言う人たち」

と言われるような生き方です。

神様の存在を無視し、他人を排除し、自分が一番気持ちの良いことを考えます。それは、エデンの園で善悪の知識の木を食べた人間の罪です。

私たちが今生かされているこの日本は、高齢化が進み、人口減少社会となりました。日本は戦後、世界が驚くほどの経済成長を経験しました。そのために日本には、拡大・成長の価値観が根付いています。大量生産、大量消費によって、成長するのだという価値観です。

経済成長は、人々に不幸をもたらしました。社会保障の問題（医療や年金、福祉）、国家の財政の問題、格差の拡大（雇用や生活の不安定さ）、未婚化、晩婚化、そして出生率の低下、社会的孤立、社会のつながりがなくなっている、核家族化、孤独な生活、ひきこもり。たくさんの不幸であふれています。

拡大・成長の価値観は産業化時代以降の資本主義の考え方から始まっています。資本主義のルール、欲望のルールです。強いものが生き残り、弱い者は無捨てられることが当たり前になっています。

昨日、10月3日はドイツ再統一の記念日で、ドイツの国民にとって大切な祝日となっているそうです。ベルリンの壁が崩壊したのは1989年の11月。翌年の1990年の10月3日に東ドイツが西ドイツに加わりました。今からちょうど30年前です。

東西冷戦が終わった。社会主義が崩壊して、資本主義が勝った。社会主義が自滅したにも関わらず、資本主義では格差が広がるにも関わらず、資本主義が勝利したのだと、自由な経済競争をすることが、豊かな社会を築くことだと、そうして30年経ちました。

資本主義は“富める者がますます富める”ルールです。そしてそれは植物や動物の搾取、生きている生き物だけでなく、生き物の死骸からできる化石燃料さえも使い尽そうとしています。環境を破壊し、人間をも苦しめています。

にもかかわらず、そのようにして豊かになることは悪いことじゃない、むしろ良いことであり、成長し、発展しているのだ。個人の欲望が全体の利益になるということが信じられています。

本当に幸せでしょうか。地球の資源も無くなり、環境を破壊し、コミュニティが壊れ、格差が広がり、人は皆疲れ果てています。

私たちは、どのような人生観を持つのか。私たちは、本当の働き方改革、生き方改革、社会の改革をしなければなりません。

成長しなければ、力を持たなければ、というプレッシャーの中で、何かができないと受け入れてもらえなかったり、人に助けを求めづらかったりする世の中であって、救い主イエス・キリストによって力づけられて生きる人生があります。互いに助け合って生きる人生があります。

3. 主のみこころによって生かされる人生

ヤコブ書4章15節

「むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう」

主のみこころは何かを求めながら、神様に生かされる人生を生きるという人生観を持ちたいのです。

今日、私にいのちがあるということは、神様の計画があるということであり、生きる意味があるということです。主のみこころが私たち自身の計画となり、行動力となり、主のみこころによって生かされ、力づけられて生きる生き方があります。

そのような人生観は、自分で将棋を指す棋士のイメージではなくて、自分は神様によって指される駒のイメージなのかもしれません。

「弱い駒をうまく使いこなすことが勝負を制する一つのカギ」、
「最も力の弱い駒は最も大事な駒である」、「弱い駒をいかに強くするか」、
と言われますが、弱い駒である私が神様によって用いられて生かされていく、そんなイメージが浮かびます。

「将棋は歩から」いわれますが、歩は弱くとも、しかし、この歩の存在がなければ、防御もできないし、攻撃もできません。

また、角や桂馬は一番弱い歩で追われることがあるそうです。角や桂馬をどう生かすか。使いにくい駒であっても、使い方によっては最強と言われる飛車よりも良い働きをすることができるというのです。

将棋には、弱い歩が無くてはならないし、使いにくい角と桂馬をいかに活躍させることができるか、「弱い駒をうまく使いこなすことが勝負を制する一つのカギ」であり、そして、それこそが将棋を指す醍醐味なのです。

この醍醐味は、共に生きる私たちの人生の醍醐味でもあります。たとえ弱くとも、たとえ扱いにくくとも、主なる神様が力づけてくださり、主なる神様が用いてくださる。将棋の駒がそうであるように、一人で生きるのではなくて、共に助け合いながら、共に力づけ合いながら、共に生きていく醍醐味がある。

その人らしく、個性を大事にしなが、弱点や欠点も含めて、主なる神様に生かされる人生があります。それぞれに違う私たちが、共に生かされる人生があります。

自分の計画がすべて、自分が選び取ってきた人生だと言うのではなくて、その背後には神様の存在があり、神様の導きがあり、神様の与えてくださるいのちがあつてこそその人生です。

私たちは神様に力づけられながら、そして共に助け合いながら生きていく、そんな人生を送りたいと思うのです。